

第六十四回

静岡県保育研究大会

令和七年一月三十一日
沼津市 プラサヴェルデ

令和七年一月三十一日沼津市のプラサヴェルデに於いて、二〇二四年度静岡県保育研究大会が開催されました。本大会には、一五三名の大会運営関係者を含む五〇〇名が参加しました。

ホールAでの開会式では、県保育士会野中徹副会長により児童憲章が朗読され、土山雅之運営委員長の挨拶に続き、開催地沼津市の吉澤勇一郎副市長様、県健康福祉部豊田大こども未来局長様、県社会福祉協議会藤原学常務理事様からそれぞれにご祝辞を頂戴し、各会場に分かれ分科会の時間が始まりました。

次回大会より、分科会数が六となるため、本年度が八分科会で開催される最後の年となりました。

各分科会それぞれで東部・中部・西部各地の発表がなされ、日頃の実践をさらに深く考察した内容が披露されました。いずれの発表からも、保育者自身が日々学び工夫を重ねている様子や保育への熱い思いが伝わってきました。また、各分科会とも、助言者の先生方からの適切なアドバイスや発表に関連する広い観点からのお話もいただき、参加者一同、より質の高い学びを得ることができました。

一般参加者からの質疑も活発に行われ、午前中になされた発表だけでは気づけなかった部分には、丁寧な回答が引き出され深い学びに繋げることが出来ました。

どの発表も甲乙つけ難い中、相模原市で開催される関東ブロック保育研究大会に派遣される議長・発表者が選抜されました。

開会式では今大会の研究成果を広く内外に伝えるために「大会宣言」が採択されました。

今大会を成功裡に終えることができ、準備を重ねてこられた発表者の皆様、助言者の皆様、運営に携わった皆様、そして各園の現場を支えてくださった皆様等関係者各位に、心より感謝申し上げます。

これからも、学びあう仲間としてお互いに支えあい、静岡県の保育を盛り上げていきたいと思います。



速報

「第六五回

関東ブロック保育研究大会

相模原大会」開催される

令和七年七月三・四日に相模原市において、関東ブロック十五都県市より保育関係者が参集し、「すべての子どもの権利と育ちを保障していく社会の実現」をめざしての主題のもと、標記の大会が開催されました。

静岡県からは、「第六十四回静岡県保育研究大会」に於いて選出された、第六分科会議長に、函南町 ひまわり保育園 渡邊栄子園長、発表者には、第四分科会の菊川市 みなみこども園 落合孝行園長、第八分科会の静岡市立東豊田こども園 増田寿子園長、静岡市立登呂こども園 富永純子園長が静岡県の代表者として登壇されました。

また、開会式において、土山雅之前会長が関東ブロック保育協議会役員としての功績が評価され、感謝状が授与されました。



第一分科会

テーマ 【新たな時代の保育実践】

すべての子どもにむけて

発表者 ①三島市 市立伊豆佐野保育園

保育士 飯田真美子

②静岡市 市立下川原こども園

保育教諭 山梨 彰汰

③浜松市 浜北西保育園

保育士 大城紗矢佳

議長 静岡市 春日保育園

園長 近藤 正美

助言者 静岡県立大学短期大学部

こども学科特任教授 永倉みゆき

記録者 静岡市 有度十七夜山保育園

園長 笠井 友泰

発表(一) 幼児期における金融教育とは

「伊豆佐野保育園独自通貨」

佐野チップを通して

幼児期にお金について考えることは可能なのか。独自通貨「佐野チップ」を使い金融教育についての研究を行った。お店屋さんごっこ等の遊びの中で、働くとお金がもらえる・貯めると高価なものを買う・使ったらなくなるという基本的な通貨の性質やコミュニケーションスキルが身に付き、数字や文字への関心、仕事を任される責任感等、様々な子ども達の成長する姿を見ることが出来た。ただ、

子ども達が関心を引くような色々な仕事の設定や興味のない子への配慮も必要だった。また、このような取り組みには保護者との連携や職員の話し合いの時間の確保等様々な苦労があった。

発表(二) 五歳児交流を通して、地域の繋がりを

深め、円滑な幼小接続を目指す保育

コロナ禍で社会との接点が減る傾向にあったが地域とのつながりの重要性を再認識する活動を、就学を控えた五歳児同士の交流をICTを取り入れ子どもが楽しみながら行えるように研究を進めた。長田地区の近隣五カ園で対面やzoomでの交流を進めていった。仲間意識の芽生えやコミュニケーションの広がりが見られたり、自分の思いを積極的に表現したり、人に対して思いやりを持つて関わろうとする子が増えていった。小学校の学区が同じ子ども達が多いので、幼小架け橋期の円滑な接続となるよう努めていきたい。また、災害時にも園の垣根を越えて子どもを観合う体制を作り、対応できるように交流を継続していく。

発表(三) 保育で取り組むSDGs ～保育園時

代から学ぶことの重要性

SDGsは特別な事ではない。知らずにやってきた事もそれに結びついているのではという保育者の気付きがあった。子ども達の日々の生活の中で食べ残しなどの無駄を考えたり、分別を行うことから取り組んでみるこ

とにした。しかし、幅が広くなると理解した内容が混乱していった為、四つの目標に絞って保育者と共に理解を深めた。紙芝居だけでなくDVD、Youtube等も使い丁寧に伝えていくと子ども達も環境問題などについて自ら考えていけるようになった。また、清掃工場見学や砂丘のゴミ拾いへと繋げていった。未来を担う人材育ての重要性を改めて感じることが出来た。

助言者より

幼保こども園の違いや園の大小によって職員の話し合いの時間を確保することは難しいが、よく話し合いを重ねていたと思う。やりたくない子への配慮等も行い、保育指針に基づき幼保小の繋がりを地域を意識した取り組みとなっていた。注意すべきは小学校教育の先取りをしたり、先生の望む姿を子どもに当てはめないように、遊びの中から組み立てていきましょう。と助言を頂きました。



第二分科会

テーマ【配慮を必要とする子どもや

家庭への支援にむけて】

発表者 ①伊東市 市立富士見保育園

主 任 青木のりこ

②川根本町 町立三ツ星保育園

主 任 鈴木 好美

③浜松市 市立江西保育園

主 任 大岩 祐佳

議長 袋井市 めいわ月見保育園

園 長 大石 里美

助言者 静岡大学教育学部

教 授 香野 毅

記録者 袋井市 めいわ可睡保育園

園 長 鈴木 教江

発表(一) 児童発達支援事業所

さくら園とのつながりから

園と隣接している児童発達支援事業所と三十年以上共に生活し、交流している。そのような保育環境から①合同運動会への取り組み②加配児の交流の二点に焦点をおいた保育実践をまとめた。一緒に保育計画を立て細かく話し合い職員同士の連携を図り、子に合わせた参加の仕方や内容の工夫をしたことで、色々な経験ができ子ども達が成長していく姿があった。

一緒に過ごす中で優しさやいたわりの心が

芽生えたり、お互い刺激を受け視野が広がりたり相互の成長があるため今後も一緒に育ち合える保育環境を大切にしていきたい。

発表(二) 一人一人を大切に作る保育、

家庭支援

自然が豊かで療育施設のない町だからこそ子どもにかかわる全ての人と連携を密にし、心身共に健やかに育てる取り組みを行った。事例として特性の異なる二人に知育プログラムを計画し、個の特徴を踏まえた支援を実践していく。定期的に教育相談員からアドバイスをもらい、一人一人に適した支援を継続的に取り組んだことが二人の力となった。環境が変わっても崩れることなく小学校への移行がスムーズになるよう関係機関が一丸となり、「町の子どもは町で育てる」という思いでより良い支援を行っていききたい。

発表(三) 子どもの特性を捉えた環境づくりと

関係づくり

子ども達が過ごしやすい環境を整えることをテーマとし、特性を理解する方法を学び、その中で保護者とう向き合っていくか考えた。

関係機関見学での学びを通して保育園としてできることを考え、保護者の困り感をどう引き出していくかをアンケートで探っていくと同時にスモールステップの支援を組み立てていった。関係機関や家庭と連携をとりながら成功体験を重ねた関わりを継続していく

と、困った行動が気持ちの表れと捉えることができた。今の関わりが土台となり将来花開くことを信じて子の育ちと家庭の支援を継続していきたい。

助言者より

研究を通してそれぞれの園の保護者は育ってきたことが分かり、保護者対応が一步進んだと感じた。三つの園ならではの土地や環境の強みを生かした実践となっていた。インクルーシブとは共に学ぶことを追求しつつ、その上で一人一人に合わせた学びを充実させることである。保育の専門性は保育を創造する力であるため子ども理解を起点にしていく。

そして、保護者支援では受容するというより深く広い子ども理解を目指していく。多様な視点で理解し、保護者と共に一緒に考えていくことが大切である。



第三分科会

テーマ【保育者の資質向上を図り、

保育現場の魅力を発信する】

発表者

①富士宮市

市立上井出保育園
保育士 秋田谷由美子

②焼津市

保育園協会保育部会
たかくさ保育園
保育士 小野田 穂香

③浜松市

聖隷こども園めぐみ
保育教諭 朝倉 紗央

議長

富士市 松岡保育園

助言者

常葉大学保育学部
副園長 山崎 文隆
教授 山本 睦

記録者

富士市 富士保育園
園長 後藤 匡

発表(一)

「こどもも大人も安心して過ごせる
富士宮市立保育園」を目指して
次世代リーダーたちの学びと
取り組み

富士宮市の十三カ園の公立保育園で取り組む「次世代リーダー養成研修」は三十五歳以上の正規職員を対象に行い十三年目を迎える。公立園の特徴として異動や地域性、園ごとの特色など、保育の方向性を共有し、ここに配属されても同じ方向を向いた保育ができる土台作りとして取り組む。リーダー同士で

の保育の語らいや同僚性を育むワークでは自己理解を深め、職員同士が安心して発言できる環境を作ることが必要だと感じた。課題レポートでは自分たちの保育を言葉にし、具体的に確認することで資質向上につながった。信頼関係から安心・同僚性が生まれ、子どもについて安心して語り合え、過ごせる場所であることがより質の高い保育を生み出すサイクルを作ると感じた。

発表(二)

子どもたちの育ちを支える保育の実
践～園見学から学ぶ～

焼津市内公私立十三カ園では毎年部会ごとにテーマを決め活動している。中堅保育士部会では年間を通して市内の保育士たちで前後半に分け各園を見学し合い、各園の実践を見ることによって学んだことを共有し、子どもの育ちを支える保育について多面的に考察していく事を目的とした。見学を受け入れあうことで自園には無い異年齢保育や遊びの環境などを見ることができ、子どもの姿からの気づきや新たな視点の意見をもらうことができた。各園の実践を見学することによって気づきを得て意識を向上させることがつながった。

発表(三)「子どもの表現の研究」を通して

保育の質の向上を目指し毎年行う保育学会では各園の課題をテーマとして取り組んでいる。ワークショップ型園内研修やそれを踏まえた保育実践の共有・振り返りを園内で発表する。保育場面を可視化し、研究の場を通し

て各園の強み弱みを発表し合い共有し、生かし合うことで自分の園の保育の幅が広がり、新しい課題を発見したり子どもを見る目を養うことができ保育の質の向上につながっていると感じる。子どもをより深く捉えることができることで保育の楽しさ、やりがいにつながっていく、保育者自身も成長していくことができる。

助言者より

分科会のテーマの「質を高める」は限定して二つの要因しかなく保幼小接続と家庭教育への介入であり、就学前の保育をどう進めていけばいいかは明確になっている。子供同士のそこで出てきた言葉だけ、表情だけを拾うのではなく行動そのものを記述することを心がけてほしい。問題解決を図るそのベースを就学前に作る。それに必要なのが非認知能力であり、それができることの証明が十の姿になる。それぞれの園で取り組んだ報告も体系化することで園の風土やルールになる核ができ保育者一人一人と園全体の理解が深まって保育に対する理解が深まっていくというようなことにつながる。



第四分科会

テーマ【地域の子育て家庭への
支援の充実にむけて】

発表者 ①富士市 市立浅間保育園
主任 内藤千香子

②静岡市 市立有度西こども園
副園長 田中紫保子

③菊川市 みなみこども園
園長 落合 孝行

議長 静岡市 市立瀬名川こども園
園長 内野 有子

助言者 静岡福祉大学子ども学部
教授 永田恵実子

記録者 静岡市 市立八幡こども園
園長 山本 知子

発表(一) 地域の子育て家庭への支援の充実に
むけて 今の時代に求められる子育て
支援～みえる・わかる・つながる～

これまでの子育てについての情報の発信は利用者が限定されていたことから、在園家庭だけでなく未就園の保護者の子育ての悩みを探り、必要な情報を発信し、現状に寄り添った支援に取り組んだ。園の特色を活かしたプロジェクトの活動を発信したり園の生活を撮影した動画の視聴会や、栄養士による講話を行うと参加した保護者から「入園前に園のことが知れてよかった」と好評だった。今後も

地域と家庭の架け橋となり、支援を続けていきたい。

発表(二) 地域の子育て家庭への支援の充実に
むけて 保護者一人一人の抱える課題や悩みに寄り添い専門職としてできること

子どもの健やかな成長のためには保護者の心身の安定が重要であると考え、子育て家庭のニーズに寄り添った支援について見直すとともにこども園の役割について考えた。おしやべりサロンに参加した親子の事例や、保護者の思いやニーズを調査するため、アンケートを実施した。集めた事例を園内で共有することで保育者の意識を改革することに繋がった。企画を工夫したことで参加者から「参加してよかった」「また行きたい」という感想を聞くことができた。こども園は保護者が気軽に相談でき安心して思いを出せる場所となり、保護者の思いに寄り添いながら、子ども一人一人の育ちを丁寧に支えていきたい。

発表(三) 地域の子育て家庭への支援の充実に
むけて こども園を中心とした地域
コミュニティ形成の可能性

近年の少子化に伴い、入園児数が減少したことから、より地域に愛され必要とされるこども園を目指し、「子ども食堂」(つながりひろば)を開催した。安全に過ごせる環境があり、子育てや食に関する専門家がいるというこども園の施設の特徴を活かした内容であ

り、未就学児から小学生までの参加者と中高生ボランティアが集まり、これまでに二回開催することができた。こども園を中心とした地域コミュニティを形成し、多世代がつながることによって多様な効果が生まれやすいのではないかと感じた。

助言者より

こども家庭庁の「幼児期までのこどもの育ちに係る基本的なビジョン」に示されているように、誕生からの一〇〇か月は非認知能力を育て、生涯の幸せを育てる時期である。地域や園の特徴を活かし、様々なことに取り組み、切れ目のない支援をしていくことが大切。保護者の悩みは子育てに対する不安。子育ての方法を具体的に伝え、できたところをほめていく。上手いかわなくても「また相談したい」と思ってもらえるといい。



第五分科会

テーマ 【子どものより良い育ちと安全・安心の環境づくりにむけた関係機関とのネットワーク】

発表者 ①沼津市 青空保育園

主任 渡邊 有子

②静岡市 私立保育園園長会

保育内容部会

風の子保育園

園長 白鳥 昌世

③磐田市 バディ保育園

主任 川上 由理

議長 浜松市 子育てセンターかきのみ

園長 中野 久実

助言者 常葉大学健康プロデュース学部

教授 柴田 俊一

記録者 浜松市 子育てセンターかきのみ

主幹 一瀬 彩

発表(一) 保育目標の「見える」化と関係諸機関の具体化の試み

園が掲げている保育目標が抽象的で曖昧であり、協同すべき諸機関とは何か明確化されていないことが問題点としてあがった。この問題状況をふまえて、保育目標を子どもの望ましい行動や態度として具体化し、それを実現させるために利用する資源を探ったり、連携できる人、諸機関をリストアップしていつ

た。「子どもの最善の利益」をより高いレベルで実現するために、今後も目的を具体化した園と関係諸機関とのさらなる連携、取り組みを行っていききたい。

発表(二) 小学校とのより良い接続・連携をめざして

園と小学校との接続、連携についてより良い方向に導く為の方策を求めて、研究をおこなった。小学校側に園生活や園児一人ひとりを理解してもらう機会を作ったり、園側も小学校を理解し、学校見学や登校体験等、学校への積極的な提案、計画、実施などアプローチが必要であることが分かった。小学校とのよりよい連携の構築を目指し、接続、連携を取りやすくなるよう、今回の学びを活かして連携を深めていきたい。

発表(三) 園行事を通して、地域とのつながりを考える

子どもを取り巻く環境が大きく変わり家庭で当たり前として経験してきたことが希薄になってきている今、園として何を経験・体験し、子どもの生きる力にしていけるかが課題である。保護者だけでなく、親子・祖父母や地域の方へも行事の呼びかけをし、親子・祖父母関係をより良いものとし、地域とのつながりの深まりから「子育てをみんなで楽しむ」ことの大切さを感じた。今後は、自園での取り組みだけでなく、さらに小中学校、地域へのつながりを深め、園としての役割を担っていききたい。

助言者より

「子ども一人育てるには村人百人の力が必要」子どもを育てるには家族以外のたくさんの人が関わって、やっと子どもが育つ、というアフリカの諺を表すような連携についての研究であった。園を取り巻く物的・人的な社会資源を明確化させる「エコマップ作り」をぜひ取り入れてもらいたいと思う。地域の中に存在する園、地域に守られて育つ環境に置かれていたということを、保護者や来園者に明確に知らせることができるツールとして利用してもらいたい。そして地域と共に、子どもの育ちを支え、安心して過ごせる環境づくりに取り組んでいくことが大切である。



第六分科会

テーマ【家庭や地域の連携による食育の推進】

発表者 ①伊豆の国市 市立あゆみ保育園

主任 和田 明美

②島田市 食育研究部会

市立第三保育園

主任 杉本 毅人

③袋井市 いわた保育士会研究部会

市立山梨こども園

保育教諭 岩附 愛菜

議長 函南町 ひまわり保育園

園長 渡邊 栄子

助言者 静岡英和学院大学短期大学部

食物栄養学科

講師 小川ももこ

記録者 伊豆の国市 ひまわり保育園

園長 佐藤理佳子

発表(一) 食べることは生きること

子どものための食育とは何か

一人一人の食への興味関心や嗜好が異なる中、保育における子どもの食育計画と実践に向けて、家庭、保育園、地域と連携しながら食環境の工夫と栽培活動に取り組んだ。①食物シルエットクイズや給食ランチョンマットを手作りし食への興味関心を育んだ。②スイカと椎茸原木の栽培活動を行った。栽培過程の中、カラスからスイカを守るために子ども

同士の話し合いや近隣の農業高校生に育て方を聞くことで収穫に繋がった。椎茸原木の育て方は、保育士も分からないことから地域の椎茸先生に教えてもらいながら椎茸小屋と一緒に作り育て食した。結果、子どもが主体となり色々な活動を進めることができ、食への関心や意欲に繋がった。

発表(二) 「お口ぼかん」を通して 保護者、保育者、調理員の連携を図り楽しく

食べる子を目指す

島田市食育推進計画つなげる食育・つながる食育を根幹に置き、口を閉じて食べられない子（お口ぼかん）に着目し、その学習を通して保育者、調理員、保護者、地域との連携を研究の目的とした。内容は①お口ぼかんの子の実態調査を行い人数把握②歯科医や管理栄養士から食育の知識や鼻呼吸の重要性を学んだ。③研修会の学びを基に、保育に全身から口の動きを取り入れた運動を行ったり、給食によく噛んで食べるカミカミメニューの提供をした④地域の老人ホームへ訪問し口の運動を伝えたり管理栄養士による保護者向けの講習会を実施。結果子どもはよく噛んで食べるようになり保育者、調理員、保護者、地域の学びの連携とこども理解が深まった。

発表(三) 食に対する興味、関心のあり方を深める

食べる意欲が薄い、偏食、食事のマナー、食物アレルギー児の増加による職員や保護者

の意識が薄いことが課題に繋がった。そこで①保護者アンケートを実施し食事への悩みを把握した。偏食、食事時間、姿勢などの悩みの中で偏食に着目し、野菜の栽培、食べ物の絵本や手遊びの導入、クッキングを行うことで食に対して興味を持たせ、楽しさや嬉しさから自ら食べるようになった。②保護者に、食物アレルギー児への対応や取り組みを伝え共通理解を行った。以上の取り組みから、食育活動は、保護者との連携が必要不可欠と分かり、保護者支援と理解に繋がった。

助言者より

食育は、生活全般を占め、経験により生まれるため、大人（保護者・職員・地域）が食経験や栄養の理解を深めることが大切である。研究発表から①職員の意欲的な栽培活動と地域への働きかけにより、子ども達の豊かな経験となった。②お口ぼかんを着眼点とした研究で保護者にフィードバックをしたことは家庭との共通目標となった。③子どもは見ただけの食経験の少期の食経験の豊かさを伝えて欲しい。発表内容を活かし、食と教育に携わる者が、今後も食育の土台作りに研鑽していただきたい。



第七分科会

テーマ 【保育の社会化に向けて

～保育の営みをいかに社会に

発信するか～】

発表者 ①富士市 わかくさ保育園 園長 寺尾よしみ

②牧之原市 細江保育園 園長 横井 範子

③湖西市 きりつ保育園 代表 小野 哲郎

議長 藤枝市 あおぞら保育園 園長 榛葉 省子

助言者 常葉大学短期大学部保育科 教授 鈴木久美子

記録者 藤枝市 岡部あさひな保育園 園長 殿村 智子

発表(一) 『地域と絆で繋がりを ふたたび』

わかくさ保育園は、かつて地域との深いつながりを持っていたが、時代の変化やコロナ禍の影響で関係が希薄化した。そこで、地域との交流を再開し、保育園の役割や発信の方法を模索した。今年度は慎重に取り組みを進めたが、地域の集まりに参加する中で、園の認知度の低下を実感。まずは園を知ってもらい、徐々に交流を深め、地域資源を活用した保育を目指したい。次年度は継続的な関わりと新たな取り組みを通じて、地域に根ざした

園づくりを進める。

発表(二) コロナ禍からの脱出

～地域との繋がりをもう一度～

かつて地域と深く関わっていたが、コロナ禍で交流が途絶え孤立した。そこで、地域とのつながりを再構築するための研究を行った。地域の協力によって園では体験できない活動が可能になり、災害時の避難先や支援の存在も再確認できた。また、園の発信をきっかけに地域主体の交流の場が増え、こどもたちの存在をより身近に感じてもらえた。今後「こどもまんなか社会」の実現を目指し、地域とのつながりを深めていく。

発表(三) 身近な社会から共感を得る

本園は〇～二歳児対象の小規模保育園であり、開園から五年が経過した。小規模保育園の認知は広がりがつつあるが、運営上の課題も多い。そこで、「保育の営みを社会に発信する」をテーマに、保護者のニーズに合った情報発信を模索した。

研究を通じて、保護者の声を共有することで職員の意識が変わり、寄り添う姿勢の大切さを実感した。共感を得ることが園と社会のつながりの基盤であり、今後も社会の変化を敏感に捉えながら、より良い保育の提供を目指していく。

助言者より

コロナ禍を経て迎えたこの年に「保育の社

会化」をテーマに研究したことは大きな意味を持つ。小規模園の発表を初めて聞き、「社会に発信するとは何か」を改めて考える機会となった。コロナ禍で孤立感を覚えた園も多く、地域へどう飛び込んでいくかが課題である。SNSだけでなく、地域のコンビニや薬局にチラシを置くなど、対面での発信が本来に必要な人へ届く手段となる。散歩や作品展への参加も地域への発信につながる。多様化する小規模園の役割や保護者との関係性を踏まえ、発信の目的を明確にすることが求められる。また、園の保育を発信する力は、保育士の確保にもつながる重要な要素でもある。



第八分科会

テーマ【公立保育所・公立認定こども園等の使命と地域社会での役割】

発表者 ①御殿場市 市立原里第一こども園

園長 吉田 敏彦

②静岡市 市立東豊田中央こども園

園長 望月 明美

③御前崎市 市立さくらこども園

園長 山下 美幸

議長 浜松市 ありたまこども園

副園長 西川 町子

助言者 静岡英和学院大学人間社会学部

静岡福祉大学子ども学部

非常勤講師 徳浪 芳江

記録者 浜松市 ありたまこども園

主幹保育教諭 古田 裕子

発表(一) 保護者・地域へ保育を伝える取り組みと保育の質の向上

保育を通して子どもの育ちを、クラスだより・園だより・掲示により保護者に伝えたり地域通信等で地域や学校に保育を分かりやすく伝えた。また保育を分かりやすく伝えることで保育の質の向上を図った。子どもたちの育ちを文章で伝えることで、保護者が改めて気づく育ちもあった。保護者に分かりやすく保育を伝える取り組みは、これまで実践してきた保育の中で、子どもの「何が育ってきた

のか」「何が育って欲しいのか」等、自分たちの保育を見直す機会となり、保育士としての自覚を促すとともに、保育の質の向上にもつながっている。

発表(二) 様々な関係機関との連携・学び合い

近隣や地域の私立こども園・保育園に支援サポート強化事業研修への参加を呼びかけ、特別支援教育について共に学んだ。また公立園の保育を公開したり、私立園の特色を生かした保育を見学するなど互いの保育を学び合う取り組みを行った。今年度から、保育ソーシャルワーカー事業をスタートさせ支援方法を学んだり、小学校への情報提供など連携を強化し、切れ目のない支援を実現している。

また「とろフレレンズ」の開催をし外国籍の子どもや保護者の支援も行い、安心して子どもを産み育てやすい街の実現を目指す。

発表(三) スクラムで推進する途切れない教育

「スクラム・スクール・プラン」として、①園・小・中・高の途切れない教育で推進する子どもの育成②親の学びや育ちを応援する家庭教育支援③個性伸長教育の推進に力を入れている。みんなで「スクラム」を組み「相互理解」を基にした「こども観・教育観」の「観の共有」の深化が、途切れない教育の実現に繋がっている。御前崎に「帰ってきたくなる教育を！」を目指し、公立・私立の枠を超えて共に子どもを育てるという意識を持ち、より質の高い乳幼児教育を推進していく。

助言者より

こ・幼・保・小の連携を図る為には国も力を入れて「かけはしプログラム」が強く求められる。全ての子どもを対象とする中で配慮が必要とする子どもには特に手厚い支援が必要である。保育が量から質に変化する中で質の向上を図る為には私立園と共有・協働し支援に関する情報やノウハウをお互いに学び合うことが大事ではないか（効果的な学び）。公立園として今後、政令指定都市・各自治体から行われている実践から得た知見を全体の施設に還元していく役割がある。



県保育研究大会に参加して

礎になつてゐることを踏まえ、これからの保育を実践していききたいと思ひます。

浮島保育園 望月 裕巳

第一分科会

子ども達を取り巻く環境が大きく変化している中、どの園の実践も新たな課題を子ども達と一緒に考えようと、様々な創意工夫が取り入れられていました。保育者自身が時代の変化を把握し、興味を持ち、保育の中に新しいことを取り入れてみることの大切さを学びました。

また、長倉先生より「どんな時代においても幼児期に大切にすべきことは、やりたいと思ったときに大人が手助けしてくれ実現できた経験を積み重ねること。その経験が、少し難しいことでもやってみよう、考えてみようと思える力となる」という助言を頂き、学びのつながりを意識し、幼児期に必要な経験を積み重ねていくことの大切さを再確認しました。

静岡市立中田こども園 小池 亮子

第二分科会

三つの市町の発表でしたが、どの園においても各地域の特性を生かして、配慮を必要とする家庭への支援を行っていることがよく分かりました。川根本町の先生が「町の子どもは町で育てる」と仰っていた事が印象的でした。

療育的なことに限らず、様々な面で配慮が必要な家庭が増えています。必要とされている支援が、保育士という専門性を最大限に生かし、自分の置かれている状況の中でいかにできるかがポイントです。そのためにも、まずは日々自園の保護者の思いをしっかりと受け止める事を大切にしたいと痛感しました。そして、富士宮市の各関係機関と連携を図り、富士宮の子育てについて共に考えていきたいと強く思います。

富士宮市立上井出保育園 赤池 嘉江

第三分科会

保育者の資質向上については、保育課題の共有の重要性を感じました。他園の職員と保育で大事にしていることや保育実践を語り合ったり、園見学をしたりして、他園から学んだことを共有することで、自園での保育に生かすことにつながると思いました。

公・私立にかかわらず、市内のすべての園が園見学を受け入れ、学び合う取り組みは、他市町も大いに参考になる実践だと思ひます。

山本先生からの助言で、質の高い保育が幼保小接続でも大切だとお話がありました。私たちが日々行っている保育が子どもたちの基

第四分科会

「地域の子育て家庭への支援の充実にむけて」三施設の発表は、今時代のニーズを考え取り組まれていらつしやる事に学びが沢山ありました。

少子化、ネットに頼る子育て、孤立する親子など子育てに對しても希薄になる中で次世代を担う子ども達が安心安全に育ち繋がるために、子育て支援センターがまず窓口となつて親子を引き入れ、受け止める器となつてゐる事、そして地域を巻き込んで行う「子ども食堂」という斬新なアイデアに面白みや驚きを感じるとともに、私達が出来ることの可能性・視野が広がる感覚を覚えました。声の上げられない親子の発見など今後の課題もありますが、関係機関や市町



とつながり、新しい形も含め、今一度子ども
の最善の利益を考えていかななくてはと背筋が
伸びる思いがしました。

月坂保育園 井上 智子

第五分科会

今回、「子どものより良い育ちと安全・安
心の環境づくり」にむけた環境機関とのネット
ワーク」というテーマを通して、多機関と連
携する重要性を感じることができました。

保育士だけでなく、保護者や地域の方、児
童福祉施設・教育機関などと密接に関わるこ
とで、より良い支援になると感じました。小
学校との連携では、保育士として、学校との
円滑な情報共有を心がけ、子どもが無理なく、
新しい環境に適応できるよう、積極的に連携
を図っていききたいと思いました。

今後は各職種の役割を理解し、お互いの専
門性を尊重しながら、連携を深め、子どもに
とって最善の環境を提供できるように、積極
的に多機関と協力していききたいと思いました。

初倉保育園 大関 那月

第六分科会

「家庭や地域との連携による食育の推進」
をテーマに、各園の発表を聴き、子どもたち
の食への関心や興味を引き出すために、様々
なアプローチができることが分かりました。

地域の方々の協力を得ながら行った栽培活



第七分科会

動、保護者に向けた講演会、アンケート調査
など、食育を保育園内にとどめずに広げてい
くことで、子どもたち自身や保育者が学びを
より深められるだけでなく、周りの大人にと
っても刺激となり、意識が広がっていくとい
う、食育の連携の大切さがわかりました。

また、「食育」は食べることだけではなく、
食べ物が育つ環境や背景を知ること、大事
な食育のひとつであると感じ、視野を広げる
有意義な機会となりました。

なかよし保育園 西條 ゆりか

第八分科会

感じ、地域に保育を伝えていく、「こども真
ん中社会」を実現するために様々な手段を考
え取り組んでいました。地域へのアピールだ
けではなく、保護者を巻き込んだ行事等、交
流から地域とつながるために、工夫されてい
ました。つながるとは、少しずつ内容を変化
していく中で広がっていく方法と捉え、でき
ることから進める、できなかった何年間があ
るからこそ今を迎えて改めて地域との関わり
が大事なことを再確認しました。

富士市立杉の木保育園 秋山 琴美

テーマに沿って、それぞれの取り組みや切
り口での研究発表を聞かせて頂きました。

その中でも小さい規模の自治体では、連携
の取りやすさを活かして園・小・中・高で目
指す子供の姿を共有し、質の向上や保護者支
援に取り組んでいました。小学校の校長先生
が、園の環境を通して行う教育について価値
付けしてくださっていることが心強く、自分
達も頑張っていきたいと感じました。また、
私立園との公開保育の取り組みも参考になり
ました。

参加者それぞれが今回の発表の中から持ち
帰ったものを自分たちの園・自治体でどのよ
うに活かすのか、また改めて公立園としての
役割や子供達のために何をしていくのかを考
える機会になったと思います。

静岡市立登呂こども園 富永 純子